1

山から海へ吹き荒ぶ北風をしのげれば、この辺りは比較的温暖だ。

窓も戸も、戸の向こう側にある廊下の窓まで閉め切り作った閉鎖空間は、二月のわりには暖かい。床が木製のタイルで覆われているおかげもあるかもしれない。加えて窓はすべて南向きだ。職員室や保健室のある管理棟が邪魔をしてはいるが、差し入る西日は夏より鋭く机の上を焼いた。

ひとけのない、遠くから運動部の掛け声だけが聞こえてくるような教室棟の一室――この時間帯にのみ現れる、自分が支配し統治する広大な秘密基地――

――に、フォークギターのストロークが響いた。

「オッオー！　ウォーイェー！」

それも、非常にリズミカルでかなり激しいストロークだった。

「イェーエーーーー」

「おい。ストップ」

「エェエェーーーー」

「おいコラ。ストップ、って言ってるだろ」

掻き鳴らす手が止まった。

「俺の美声はまだ本領を発揮してないけど。Aメロも始まってないけど」

「お前の美声は待ってない」

「あっ、ひょっとして奏太（カナタ）の方がメインヴォーカル希望だったりする……？　俺はギター兼コーラスって感じ？　まあ……、そうだな、コーラスって主旋律じゃない分縁の下の力持ちっていうかぶっちゃけメインより細かい腕が必要になるからな、しょうがねェな。使うの、腕じゃなくて喉だけどね」

「コンビを組む前提で話を進めるな」
「コンビじゃない。デュオ！」
「どっちでもいい」
　机に広げた旅行のガイドブックを、音を立てて閉じた。目の前の男――前の席をわざわざ横にして背もたれを窓の下につけ、通路側に投げ出した足を組み、その上でフォークギターを抱えている男が、「わお」と肩をすくめた。
「えっ、なに？　奏太ひょっとして怒ってる？」
「ひょっとしなくても怒ってる」
「えっ、えっ、なんでなんでどーして!?　俺何か悪いことした!?」
「うるさい」
「えっ、えっ、えっ、いいＢＧＭじゃない？」
「求めてない！」
　奏太は立ち上がった。そして、奏太の静寂に包まれていたはずの空間を破壊した同級生の鼻の辺りに指を突きつけた。
「なんでリュウがここにいるんだよッ！　僕は今部活をしてるんだよ湊陵祭の準備を始めてるんだよ一人でいろいろ考えたいんだお前と違ってなッ！」
　奏太の「ようは邪魔だどこか行け！」という怒鳴り声を聞いて、相手――隆二郎（リュウジロウ）が、眉をへの字にした。
「えーっ、なんでそんなイジワル言うんだよ!?　俺とお前の仲じゃん!?」
「どんな仲だよ!?　僕とお前の間にクラスメート以上の関係なんかないだろ！」
「んー、もう二年弱出席番号前後してて月に一回は一緒に日直をやる仲？」
「……、まあ、それは、事実だけど――ってそうだよお前のせいで僕はいっつも一人で日直の仕事をしなきゃいけなくてこの二年弱ずっとすごい大変な思いを――」

「奏太みたいな、真面目でいい奴が相方で、俺は、本当に、幸せです」

「急に悟りを開いたみたいな顔すんな！　僕としてはえらい迷惑だ畜生！」

隆二郎にとっては幸福なことらしいが、奏太にとっては残念なことに、二人の出席番号が前後している。何せ、奏太の姓は大竹（オオタケ）で、隆二郎の姓は大嶽（オオタケ）だ。しかも、このクラスにはクラス替えがない。当然、次の四月からも同じ番号で一年が始まる。奏太にとっては頭が痛い限りだ。

隆二郎が口を尖らせた。

「部活って言ったって、奏太、さっきからずっとガイドブック読んでるだけじゃん。うち、旅行部なんてあったっけ？」

「写真部だ。どこに何を撮りに行くかで悩んでるんだよ」

「写真部って活動してんの⁉」という隆二郎の大きな声が響いた。耳を閉ざしたくなる気持ちを堪えて、奏太が「少なくとも僕は活動している」と答えた。胸を張って断言できないのは、部員の半分が幽霊部員だからだ。残りのおそらく活動しているであろう部員たちもどこで何を撮っているのか奏太は知らない。

写真部は基本が個人活動だ。極論を言ってしまえば、カメラさえあればいつでもどこでも一人で活動できる。一部は事前に許可を取ってイベントの様子を撮影していると聞いたが、風景写真を撮りたい奏太はずっと一人だ。

「わざわざ金かけて撮り行くの⁉　どこに⁉」

「今それを考えてるんだよッ！」

「あと俺も今めっちゃ部活してるぜ⁉　今湊陵祭のステージのためにデュオを組もうと思ってる相手を口説き落としてるところ！」

「へー。頑張れ」